

## ダニエル書 - 第39号

預言のタペストリーを解き明かす：ウィリアム・ミラーの夢と終末時代における根本的真理の回復

Jeff Pippenger

2024-01-03

私たちは、すべての預言が完全に成就する終わりの時における、ウィリアム・ミラーの夢の預言的適用を考察している。ミラーの夢は、ミラーの奉仕を通してまとめ上げられたアドベンチズムの基礎的真理の発見、確立、拒絶、埋没、そして回復を指し示している。それらの基礎的真理は、1798年に封印が解かれた真理を表していた。それらの真理はウライ川の幻によって表されている。『初期の著作』に記録されているミラーの夢は彼の第二の夢であり、その夢は、ミラー自身がネブカドネザルによって型示されていたのと同様に、ネブカドネザルの第二の夢によって型示されていた。

以前の記事では、ネブカドネザルが獣の心をもって過ごした「七つの時」の結末が、1798年に象徴的に終わったことを示してきた。その後、彼の王位は回復され、そして初めて、ネブカドネザルは完全に回心した人を象徴するようになった。「終わりの時」という観点では、1798年に、彼は「賢い者」を象徴していた。さらに、バビロンの最初の王であったネブカドネザルに対する「七つの時」の裁きは、バビロンの最後の王であるベルシャツアルの「二千五百二十」(mene, mene, tekel, upharsin)の裁きの型であったことも確認した。

「バビロンの最後の支配者にも、その最初の支配者の型どおりに、神の見張りの宣告が下った。『王よ、...これはあなたに告げられる。王国はあなたから取り去られた。』ダニエル書 4:31。」『預言者と王』、533頁。

ホワイト夫人は、ベルシャツアルをその裁きの時に「愚かな王」と見なした。ネブカドネザルの裁きの時の結末において、彼は「賢い王」を表している。というのも、彼は「七つの時」の裁きによって益を受けたのに対し、ベルシャツアルは歴史を知っていながら、益を受けることを拒んだからである。

しかし、ベルシャツアルの娯楽と自己賛美への愛は、彼が決して忘れてはならなかった教訓をかき消してしまい、彼はネブカドネツアルに著しい裁きをもたらしたのと同様の罪を犯した。彼は恵み深く与えられていた機会を浪費し、真理を知るために身近に与えられていた機会を用いることを怠った。「救われるために私は何をしなければならぬのか」という問いを、その偉大でありながら愚かな王は無関心にやり過ごした。バイブル・エコー 1898年4月25日。

ネブカドネザルは、終わりの時に知識が増し加わることを悟る、1798年の「知恵ある者」の象徴である。

高慢な自慢の言葉が彼の口を離れるか離れないかのうちに、天からの声が、神が定めた裁きの時が来たと彼に告げた。たちまち彼の理性は取り去られ、彼は獣のようになった。彼はこうして七年間落ちぶれていた。この期間の終わりに、彼の理性は回復し、

彼はへりくだって天の大いなる神を仰ぎ見、この懲らしめのうちに神の御手を認め、再び王位に復した。

「公の布告において、ネブカドネザル王は自らの罪と、回復に際して神が示された大いなるあわれみを認めた。聖史の記すところでは、これは彼の生涯の最後の行為であった。」 Review and Herald, 1881年2月1日。

ネブカドネザルの「七つの時」の終わりに、彼は公に布告を発し、その中で公に告白した。ネブカドネザルになぞらえられたミラーは、終わりの時における知識の増加を理解する1798年の「賢い者」を象徴している。彼らは共に二つの夢を見ており、それぞれの二番目の夢が象徴的に「七つの時」を指し示している。「七つの時」は、これまでの記事で転換点を示すものとされてきた。

1798年、ネブカドネザルは高慢な状態から賢い者の状態へと移る転換点を迎え、それには彼の公の告白が含まれていた。1798年はまた、聖書の預言における第五の王国と第六の王国のあいだの移行点でもあった。さらにそれは第一の天使の到来を示し、新たな経緯の幕開けを告げるものとなった。というのも、聖書の預言における第五の王国が致命的な傷を受けるまでは、来るべき裁きの警告は行われ得なかったからである。

この運動がいつ起こるのかについては、メッセージそのものがその時期を明らかにしている。それは「永遠の福音」の一部であると宣言され、裁きの開始を告げている。救いのメッセージはあらゆる時代に宣べ伝えられてきたが、このメッセージは、終わりの日にもみ告げることのできる福音の一部である。というのも、その時になって初めて、「裁きの時が来た」と言うことが真実となるからである。預言は、裁きの開幕へと至る一連の出来事を示している。これはとりわけダニエル書において顕著である。しかし、終わりの日に関する彼の預言の部分については、ダニエルは「終わりの時までこれを閉じて封せよ」と命じられた。この時に至るまでは、これらの預言の成就に基づいて裁きに関するメッセージを告げることができなかった。しかし終わりの時には、と預言者は言う。「多くの者が行き巡り、知識が増し加わる。」ダニエル書12章4節。

使徒パウロは、自分の時代にキリストの再臨を期待してはならないと教会に警告した。「その日は来ない」と彼は言う。「まず背教が起こり、不法の人が現れない限り。」2テサロニケ 2:3。大背教と「不法の人」の長い支配の時期の後になって初めて、私たちは主の再臨を待ち望むことができる。「不法の人」は、また「不法の秘密」「滅びの子」「あの悪しき者」とも呼ばれ、教皇制を表しており、預言どおり1260年の間その覇権を保つことになっていた。この期間は1798年に終わった。キリストの再臨はその時以前には起こり得なかった。パウロのこの警告は、1798年に至るまでのキリスト教の時代全体を覆っている。キリストの再臨のメッセージが宣べ伝えられるべきなのは、その時以後である。

「過去のいかなる時代にも、そのようなメッセージが与えられたことは一度もない。すでに見たように、パウロはそれを宣べ伝えなかった。彼は主の来臨について、当時から見ればはるか遠い将来にあると兄弟たちに示した。宗教改革者たちもそれを宣言しなかった。マルティン・ルターは、その審判を自分の時代から約三百年先のことと見なした。しかし1798年以降、ダニエル書の封印は解かれ、預言に関する知識は増し、多くの人々が審判の近いことを告げる厳粛なメッセージを宣べ伝えてきた。」 The

1798年、救いの御業における新たな経綸が到来し、その新しい経綸は、1844年に始まる別の経綸についての警告を与えた。その経綸の転換に際しては、一つの戸が閉じ、別の戸が開かれることになる。

フィラデルフィアにある教会の御使いに書け。聖なる方、まことの方、ダビデの鍵を持ち、開けば誰も閉じることができず、閉じれば誰も開くことができない方が、こう言われる。わたしはあなたの行いを知っている。見よ、わたしはあなたの前に開かれた門を置いた。誰にもそれを閉じることはいできない。あなたにはわずかな力しかないが、わたしの言葉を守り、わたしの名を否まなかったからである。ヨハネの黙示録 3章7、8節

扉が開かれることは、新しい経綸の到来を示す。最初の憤りの終わりである1798年には、紀元前723年から1798年に至る期間を通して成し遂げられた、王国とメッセージにおける経綸の転換があった。最後の憤りの終わりである1844年にも、紀元前677年から1844年に至る期間を通して成し遂げられた経綸の転換があった。1798年には、差し迫った裁きを警告する第一天使のメッセージの経綸が到来した。ネブカドネツアルとミラーは共に、「終わりの時」における「賢い者」として表されており、そのとき「扉」は、第一天使のメッセージの内的経綸に対して、また外的には海から上がる獣から地から上がる獣への経綸の転換に対して開かれた。第一天使のメッセージの経綸は、1844年10月22日に至聖所への扉が開かれたとき成就し、第三天使のメッセージの経綸と調査審判が到来した。

ミラーの第二の夢は、1798年に扉が開かれたときに始まり、「真夜中の叫び」のメッセージを宣べ伝えるためによみがえらされる「二人の証人」の過渡期に扉が開かれたときに終わる。預言的に、ネブカドネツアルもミラーも、1798年における海からの獣の王国から地からの獣の王国への移行を象徴した。彼らはまた、1844年の調査審判の接近と到来の告知を表している。1798年と1844年は、レビ記26章に示されている「七つの時」の期間にわたって神がご自分の民に対して行われた最初と最後の「憤り」の終結を表している。1798年から1844年に至る46年間は、契約の使者が1844年10月22日に突然来られた霊的神殿の建設を表しており、そのときキリストは聖所から至聖所へと移られた。

1798年と1844年は、「七つの時」によって印づけられた移行期（複数）を指し示している。1856年における、ミラー派のフィラデルフィア的アドベンチズムからミラー派のラオデキア的アドベンチズムへの移行も、のちに1863年に退けられることになる「七つの時」に関する知識の増大によって印づけられていた。1798年には、ダニエル書に関する知識の増大があり、その中にはレビ記26章の同じ「七つの時」も含まれていたが、それはミラー派フィラデルフィア的アドベンチズムの終わりに退けられることになった。

第一の天使の運動がフィラデルフィアからラオデキアへと移行することは、1856年から1863年までの七年間によって示されていた。ラオデキアのメッセージは1856年に到来し、封印が解かれた「七度」の新しい光はその後の七年間にわたり三段階の試練の過程をもたらし、アドベンチズムは1863年にそれを通過できなかった。「七度」の光を受け入れるか退けるかのために七年間が与えられていた。ミラー派のフィラデルフィア的アドベンチズムからミラー派のラオデキア的アドベンチズムへの運動の移行は、終わりの時におけ

る順序の反転、すなわち第三の天使のラオデキアの運動から第三の天使のフィラデルフィアの運動への移行を型どっている。

イザヤの六十五年の預言は、イスラエルの北王国、そして次いで南王国に対する神の御怒りのうち、最初のものとして最後のものの始まりを告げるものである。

アラムの頭はダマスコ、ダマスコの頭はレツィン。六十五年のうちに、エフライムは打ち砕かれて、もはや民ではなくなる。イザヤ書 7:8

イザヤの六十五年に関する預言は紀元前742年に与えられ、六十五年以内に北王国は滅びると告げられていた。紀元前742年から十九年後の紀元前723年に、北王国はアッシリアによって捕囚にされた。六十五年の終わりにあたる紀元前677年には、マナセがバビロニア人に捕らえられ、南王国に対する憤りが始まった。したがって、この六十五年は、北王国の最初の捕囚までの十九年と、その後マナセの捕囚に至るまでのさらに四十六年を表している。

それらの預言は、それぞれ1798年、1844年、1863年に成就した。1798年には、第一の天使の到来とともに救いのメッセージの内的な移行が起こり、聖書預言の諸王国にも外的な移行が生じた。1844年には、第三の天使の到来に伴い、聖所の戸が閉ざされて調査審判が始まり、救いのメッセージの内的な移行が起こった。1863年には、地の獣の二本の角が二つの階級に分かれ、外的な変化が生じた。

共和制の角は、それ以後、地の獣の歴史を支配することになる二つの政党に分裂した。プロテスタントの角は、二つの背教的な形態に分裂し、一方は自らをプロテスタントと称して第七日の安息日を守ると主張する一派、もう一方は自らをプロテスタントと称しつつも、礼拝の日として太陽の日を支持する一派であった。

その歴史において、暗黒時代から出てきたプロテスタントの角は、1840年8月11日から1844年10月22日まで試され、その試験の過程において不合格となり、日曜遵守のプロテスタントの民から日曜遵守の背教的なプロテスタントの民へと移行した。

1844年に確立され特定された真のプロテスタントの角の歴史において、1856年から1863年にかけて試練の過程があった。その後、真の安息日を守るプロテスタントの角は、フィラデルフィアからラオデキアへ、また、真の安息日を守るプロテスタントの民から安息日を守る背教的なプロテスタントの角へと移行した。「七つの時」は1798年、1844年、1856年、1863年と関連している。「七つの時」は転換点に結びついた象徴であり、この真理は複数の証言によって確立されている。

1798年には「七つの時」についての知識が増し加えられた。というのも、ミラーが最初に見いだした時の預言こそが、まさにその真理だったからである。1863年までにはその真理は退けられ、こうしてイザヤ書7章に示されている預言の六十五年の期間の終結が明確になった。

完全な二千五百年の預言は、逆像的で鏡写しのようなかたちで、その始まりと終わりの双方に六十五年の期間をもっている。預言が与えられた紀元前742年の「始まりの六十五年」の冒頭を型として、終わりの六十五年の冒頭である1798年には、「七つの時」

に関する知識が増し加わり、それを「賢い」ミラー派が理解して宣べ伝えた。終わりの六十五年の結びである1863年には、同じ真理についてさらに知識の増加があったが、それは最終的に、真のプロテスタントの角に属する最近戴冠したばかりの「祭司」たちによって退けられた。

わたしの民は知識がないために滅ぼされる。あなたが知識を退けたので、わたしもあなたを退け、あなたをわたしの祭司とはしない。あなたが自分の神の律法を忘れたので、わたしもあなたの子らを忘れる。ホセア書4章6節。

ダニエル書の封印が解かれるときに起こる知識の増大は「七つの時」と結び付けられており、したがって「七つの時」は転換点の象徴であるだけでなく、預言のメッセージの封印が解かれることの象徴でもある。

2020年7月18日、最初の失望とともに別の転換が始まり、その失望は「待機の時」を開始させるとともに、黙示録11章にある、ソドムとエジプトという大いなる都の大通りに二人の証人が死んだまま横たわる三日半の始まりを画した。

2020年7月18日は、1856年から1863年にかけての歴史によって例示されていた、象徴的な三日半（「七つの時」）の始まりを示す。両期間はいずれも「七つの時」を象徴している。両期間はいずれも体制の変化（移行）を示している。両期間はいずれも「七つの時」に関する知識の増大を表している。

バビロンの王国からメディアとペルシャの王国へと移行する時期に、ダニエルはレビ記26章の祈りをささげた。これにより、レビ記26章の祈りは、終末時代の移行を示す道標であることが示される。ミラーの夢では、“scattering”という語の七度の表現の終わりに、ミラーは涙を流し、祈る。その涙は、ユダ族の獅子（ほこり払いの男）が、封じられていたメッセージの封印を解く時点を示している。

ミラーの祈りは、「七たび」と結び付けられているレビ記二十六章に関するダニエルの祈りを指し示しており、ミラーの夢で戸と窓が開かれたときに起こる。しかし、ダニエル書九章の祈りは、ダニエル書二章の祈りとも一致している。さらにそれは、ネブカドネザルが自らの「七たび」の終わりにささげた告白の祈りとも一致する。

それゆえミラーの祈りはレビ記26章の祈りによって表されていた。それは公の罪の告白の祈りであり、また、すべての預言は終わりの時を示しているがゆえに、最後の預言的な奥義の封印が解かれることを願い求める祈りであった。したがって、ダニエル書2章の奥義は、最後に解かれるべき奥義を表している。ミラーの祈りは、彼の夢の中では、彼の部屋の宝石に起こった忌むべき所業に関する不安と義憤の祈りであった。彼の不安は、エゼキエル書9章にある、十四万四千人の封印の時に嘆き叫ぶ者たちによって示されている。

ミラーは、真理が偽りの教理によって次第に葬り去られ、ついには棺（聖書そのもの）が破壊されるに至るさまを見ていた。ミラーの棺の破壊は、アドベンチズムの第三世代に、キング・ジェームズ版聖書を脇に退けて現代の墮落したカトリック系の聖書諸訳を採用しようとする意図的な運動が起こったときに起きた。

ミラーは泣き、祈った。するとすぐに扉が開き、人々は皆出て行った。そのあと、塵払いの男（ユダ族の獅子）が入ってきて、窓を開け、掃除を始めた。そこでミラーは散らばった宝石を案じていると告げ、塵払いの男は宝石のことは自分が引き受けると約束した。塵払いの男の掃除の騒がしさのなかで、ミラーはひととき目を閉じ、目を開けると、ごみはなくなっていた。宝石は部屋中に散らばっており、塵払いの男はより大きな箱をテーブルの上に置いて宝石を集め、その箱に投げ入れて「来て見なさい」と言った。

「来て見よ」という表現は、真理がちょうど封印を解かれたことを示す象徴である。ミラーに対して封印が解かれる真理は最後の真理である。というのも、次に起こるのは、「大声の叫び」を表す「叫び」によってミラーが目覚めることだからである。ミラライトの歴史において、ミラーは「真夜中の叫び」のメッセージを最後に受け取った人物であり、夢の中で彼を目覚めさせるその「叫び」の直前に、彼は一瞬だけ目を閉じた。聖書の中で「ひと時」と「目」に言及する唯一の箇所は、第一の復活を指し示している。

見よ、私はあなたがたに奥義を告げる。私たちは皆が皆眠るのではないが、皆、変えられる。一瞬に、またたく間に、最後のラツパで。ラツパが鳴り響き、死者は朽ちない者としてよみがえらされ、そして私たちは変えられる。というのは、この朽ちるべきものは朽ちないものを着なければならず、この死ぬべきものは不死を着なければならぬからである。コリント人への第一の手紙 15:51-53

黙示録第十一章に示されているように、第三天使のラオデキヤの運動から第三天使のフィラデルフィアの運動への移行の歴史において、ミラーは、真夜中の叫びのメッセージを受け入れた賢い乙女たちのまさに最後の者を表している。最初にそれを受け入れた者たちは、最も霊的であった。

「これは、第二の天使のメッセージに力を与えることになる真夜中の叫びであった。落胆している聖徒たちを奮い立たせ、彼らの前にある大いなる働きのために備えさせるために、天から天使が遣わされた。最も才能ある人々が最初にこのメッセージを受けたのではなかった。天使たちは謙遜で献身的な者たちのもとに遣わされ、彼らを促して『見よ、花婿が来られる。迎えに出よ！』という叫びを上げさせた。その叫びを託された者たちは急ぎ、聖霊の力によってそのメッセージを響かせ、落胆していた兄弟たちを奮い立たせた。この働きは人間の知恵や学識によるのではなく、神の力によるものであり、その叫びを聞いた神の聖徒たちはそれに抵抗することができなかった。最も霊的な者たちがまずこのメッセージを受け、かつてこの働きを導いていた者たちは最後になってこの叫びを受け入れ、『見よ、花婿が来られる。迎えに出よ！』という叫びをいっそう大きくする助けとなった。」『初期の著作』238頁。

黙示録第十一章の象徴的な三日半の終わりに、エゼキエル書第三十七章で表されている二つのメッセージのうち第一のものが宣言される。第一のメッセージは、死んで散らばっていた骨を一つに集めるが、それでもなお命はない。このメッセージは「荒野で叫ぶ声」によって告げられた。したがって、エゼキエルのメッセージは、その象徴的な三日半が終わる前に始まることがわかる。その三日半は「荒野」を表しており、その「荒野」からメッセージが宣べ伝えられる。「荒野」はまた「七つの時」の象徴でもあり、それは転換点を画し、試しの過程を導入する封印の解除を示す。

メッセージには漸進的な展開があり、受容もまた漸進的である。これは、ミラー派の歴史における「真夜中の叫び」によって示されている。最も霊的な人々が「荒野で叫ぶ者の声」のメッセージを最初に受け入れ、アドベンチズムの歴史家たちは、1844年10月22日のわずか数日前にウィリアム・ミラーが書いた手紙を挙げる。その手紙の中でミラーは、ついにサミュエル・スノーの「真夜中の叫び」のメッセージを理解し受け入れたと証言している。

親愛なるハイムズ兄弟へ。私は、第七の月に、これまで見たことのない栄光を見えます。主は1年半前に第七の月の型の意味を私に示しておりましたが、私はその型の力を悟ってはいませんでした。今や、主の御名はほむべきかな。私は長らく祈り求めてきた、聖書における美しさと調和と一致を見ているのですが、それを今日までは見ていませんでした。わが魂よ、主に感謝せよ。私の目を開くための器として用いられたスノー兄弟、ストーズ兄弟、その他の人々が祝福されますように。私はもうすぐ家に着く。栄光あれ！栄光あれ！栄光あれ！栄光あれ！ ウィリアム・ミラー 『Signs of the Times』 1844年10月16日。

ミラーの夢に表されているように、真夜中の叫びの歴史が繰り返される中で、ミラーは一瞬、目を閉じた。ゆえに「一瞬に、まばたきする間に、最後のラッパとともに、ラッパが鳴り、死者がよみがえらされる」のだ。ミラーの夢の中で、彼は自分の歴史においてそうであったように、真夜中の叫びのメッセージを受け取る最後の者を象徴している。彼は、ちり払いの男が散らばった宝石を集めて、より大きな宝石箱に投げ入れる直前に、そのメッセージを最終的に受け入れる者たちを表している。黙示録第11章において、エゼキエルの第二のメッセージ、すなわちイスラムの四つの風に関するメッセージであり、また封印のメッセージでもあるものを受け入れる最後の者たちは、七つのラッパの最後、すなわち「第三のわざわい」のラッパが鳴り響く直前に、それを受け入れる。「一瞬に、まばたきする間に、最後のラッパとともに、ラッパが鳴り、死者は朽ちない者によみがえらせられ、私たちは変えられる。」（コリント人への第一の手紙 15章52節）

この箇所は、再臨の時に起こる第一の復活を指し示しているが、黙示録第十一章の大地震の時には、死んだ干からびた骨（すなわち二人の証人）の復活も起こる。その地震の「時」に、七つのラッパの最後のラッパが鳴り、通りにいた死んだ証人たちが命を吹き返す。その際、彼らはラオデキアの人々としてではなく、フィラデルフィアの人々としてである。というのも、第三のわざわいのラッパにおいて、二人の証人は封印され、朽ちない者に変えられるからであり、もはや二度と罪を犯すことはない。ミラーは、二人の証人を生かすそのメッセージ、すなわちイスラムの四つの風のメッセージであり封印のメッセージを、最後に受け取る者を表している。

そのラッパの音は、ソドムとエジプトの通りに散らされていた干からびた死骨の最後のものをよみがえらせる。ミラーは、真理が偽りの教理によって次第に葬り去られていくのを見た。やがてミラーは涙を流し、それは封印の解除が始まる時を示す印となった。というのも、その解除は漸進的な過程だからである。その封印の解除は、三日半の終わりの時期に始まった。

ミラーが涙を流した後、封印された書を解く力を持つ方が物語に登場した。ミラーの夢では、それは塵払いの男であった。ミラーが祈ると、ただちに扉が開き、それは第三の天使

のラオディキアの運動が第三の天使のフィラデルフィアの運動へと移行する地点を画していた。彼の祈りはレビ記二十六章の祈りであり、最後の預言的秘密の理解を求め、二人の証人に三日半をもたらした背きについて公に告白する祈りであり、エゼキエル書九章で印を受ける者たちの祈りであった。

祈りの後、キリスト（ちり払いの男）が入って来て、部屋の掃除を始めた。ちり払いの男の清掃作業が終わると、ミラーはしばし目を閉じ、干からびた骨がよみがえらされることになっていた期間の終わりを見極めた。続いて、ちり払いの男はミラーの部屋に散らばっていた宝石を集め、新しくより大きな小箱に入れ、それをミラーの部屋の中央にあるテーブルの上に置いた。二人の証人が旗印として掲げられる中で、旗印として彼らは、なおバビロンにいる神のほかの群れに向かって、「来て見よ、ユダの部族の獅子がたった今その新しくより大きな小箱に投じたメッセージを」と呼びかける。

今回の記事では、1798年に封印が解かれたダニエル書の真理を象徴するものとしてのウライ川の幻について考察を始める。その考察に先立って、いくつかの前提をあらかじめ提示しておいた。第一に、ミラー派のメッセージは（その成長段階においては）完全であったが、未完成であった。これは、三つではなく二つの荒廃させる権力という枠組みに置かれていたからである。第二に、ミラーの夢は、基礎的真理が最終的に回復される時、それらが元の栄光よりも「十倍輝く」ことを示している。第三に、第一の天使の運動（ミラー派の運動）は、いくつかの重要な留意点を伴いつつ、第三の天使の運動において繰り返される。ミラー派は象徴としてはフィラデルフィア人であり、回心したネブカドネツァルであったが、結局のところ不幸にも、1863年に「エリコを再建」した。

第三の天使の運動は、回心を要するラオディキヤ的な状態で始まったが、やがてエリコ（終末のエリコ）の最終的な破壊に加わることになる。

救い主は、族長や預言者たちが語ったことを廃すために来られたのではなかった。というのも、まさにこれらの代表的な人々を通して語っておられたのは、ほかならぬ御自身だからである。神の御言葉にあるすべての真理は、みな主から出ている。ところが、これらのかげがえのない宝石は、誤った枠に据えられていた。その尊い光は、誤りに奉仕するものとされていた。神は、それらが誤りの枠から取り外され、真理の枠組みに据え直されることを望まれた。この働きを成し遂げることができるのは、ただ神の御手だけであった。誤りと結びつけられていたために、真理は神と人との敵の目的に奉仕するものとなっていた。キリストは、それが神に栄光を帰し、人類の救いのために働くところに置くために来られた。『The Desire of Ages』287頁。